

## 『更級日記』の構成意識

——転生した猫の出現から姉の死まで——

大槻 福子

はじめに

『更級日記』における、転生した猫の出現の段から姉の死に至る記述をめぐっては、従来の研究において、特に緊密な構成意識に基づいたものとは捉えられず、作者の物語憧憬、或いは作者と姉のロマンチックな性向を物語る短いエピソードの羅列とする見方が多かったようである。しかし、拙稿<sup>②</sup>において、転生した猫↓長恨歌の物語を求めると姉の「ゆくへなく飛びうせなば…」の発言↓猫の死に至る流れの基底には、転生譚を含む楊貴妃説話と竹取説話の影響が窺えること、そこには、姉が男性に対して抱いていた「心深さ」を求める思いが関係しているであろうことを述べた。本稿ではそれを踏まえて、「ゆくへなく飛びうせなば…」という姉の発言と猫の死との間に置かれた、「荻の葉」の段を中心に考察を加え、ひいてはこの一連の記事の構成について改めて考察を加えてみたい。

一 「荻の葉」の段の再検討

まずここに「荻の葉」の段の文章を掲げておく。

その十三日の夜、月いみじく隈なく明きに、みな人も寝たる夜中ばかりに、縁に出でて、姉なる人、空をつくづくとながめて、「た

だ今ゆくへなく飛びうせなばいかと思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て、ことごとにいひなして笑ひなどして聞けば、かたはらなる所に、さきおふ車とまりて、「荻の葉、荻の葉」と呼ばすれど答へざなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして、過ぎぬなり。

笛の音のただ秋風と聞こゆるになど荻の葉のそよとこたへぬといひたれば、げにとて、

荻の葉のこたふるまでも吹きよらでただに過ぎぬる笛の音ぞ憂きかやうに明くるまでながめあかいて、夜明けてぞみな人寝ぬる。

(小学館 新編日本古典文学全集『更級日記』三〇三―三〇四頁)

ここで訪れた男が、女を「荻の葉」と呼ぶことについて、様々な見方が示されているが、堀内秀晃氏<sup>③</sup>が言われるように、女の歌に因むものと考えるのが妥当であるように思う。しかも、この男がその呼称で呼びかけさせているところを見れば、それ以前に女が男に詠んで送った歌によるのではなからうか。まだ交渉のない相手、すなわちこれから恋愛関係になろうとする相手に愛称で声をかけさせる、というのも想定しにくく、そうした場合の男はもつと繊細で慎重な行動をするものである。恋の始まりに、隣家にも聞こえるような声で「荻の葉」などと呼ばせては、返事を期待する方が無理であろう。物語においても、恋愛の始まりにそうした設定がなされたものは、少なくとも稿者の知る限りでは無い。こ

の男女は、既にそれなりの間柄にあるとみて良いのではなからうか。こうした場面を考える上で、『源氏物語』の次の場面などが参考に出来るように思う。

ただ一目見たまひし宿なりと見たまふ。ただならず、ほど経にける、おほめかしくや、とつつましけれど、過ぎがてにやすらひたまふ、をりしもほとぎす鳴きて渡る。催しきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の惟光入れたまふ。

をち返りえぞ恐れぬほとぎすほの語らひし宿の垣根に

寢殿とおぼしき屋の西のつまに人々あたり。さきさきも聞きし声なれば、声づくり気色とりて御消息聞こゆ。若やかなるけしきどもしておほめくなるべし。

ほとぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空ことさらたどると見れば、「よしよし、植ゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心にはねたうもあはれにも思ひけり。

(花散里、新全集二・一五四頁)

この場面で、以前関係のあった女の家の前を偶然通りかかった源氏が、惟光を使って歌を詠み上げさせたところ、それに対する女の返事がわざと分からぬふりをするものであったため、惟光が人違いを装って引き上げるのを、女が内心「恨めしくも、また心にしみる思いにも」(新全集訳)なるのである。源氏は、偶々女の家の前を通りかかり、折しも鳴いたほとぎすの声に促されるように立ち寄ってみようかと思つたものの、女の歌を受けて、そのまま立ち去って行く。源氏はこの女をわざわざ訪ねたわけではなく、無理に算段をしてまで会う必要など無いのである。惟光がそれ以上押さずに引き上げるのも、女の側の事情を斟酌したこともあるが、そうした主人の気持ちを理解していたからであろう。一方、女の側で、相手を源氏と知りつつ分からぬふりをしたのは、一度きりで

長く訪れない源氏に対しての皮肉を込めたということもある。それ故に、さつさと立ち去って行く源氏への恨めしい思いを抱いたのである。

さて、『更級日記』の「萩の葉」の場面に戻って考えてみると、季節は違い、また従者が「歌」を詠み上げたか、相手の愛称を呼んだかという点での違いはあるものの、こうした場面を参考にするのがよいのではないかと思う。『源氏』マニアと言ってもよい彼女のことであるから、もしかしたらこの場面を思い浮かべて書いていたかもしれない。この場面の男は、以前に、あるいは以前から関係があったからこそ、従者を使って呼びかけさせているのであろうし、更級日記作者が、女の返事がないことを批判したのも、そうした男女の関係を想定した上でのことであろう。これももし「恋の始まり」であると解したなら、物語好きな作者のことであるから、女よりも男の態度を無神経だと難じたに違いない。

さて、以上のように、これが既に交際のある男女のものであり、「萩の葉」の呼称が女の歌に由来とするのなら、女がそうした歌を詠んだ背景についても、考えておかなければなるまい。実川恵子氏が、和歌における「萩の葉」が、「萩の葉ずれに秋を知るといふ類型的表現に、恋歌的情趣が添加され独特な歌境が詠出される」ものであったと指摘されるように、「萩の葉」は恋の歌の素材としてもよく見られるものであった。しかも、初秋の素材である「萩の葉」は、「秋の訪れ」を知るものであることから、恋歌として読む場合には、「飽きの初め」、すなわち相手の心変わりの初めに絡めて、

平かねきが、やうやう離れ方になりければつかはしける

秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし

(後撰・恋四・中務)

のように、「遠のいていく男への恨みを、萩の葉を我身になぞらえて」詠むことなどもあったという。『更級日記』のこの場面での男は、呼びかけ

させて答えないと見るや、さっさと通り過ぎて行くところから判断すれば、もう冷めかけていたか、もともと大した愛情は持っていなかったのであろう。女がこれ以前に「萩の葉」を詠んだ歌を男に贈っていたとすると、おそらくはそうした相手の心変わりを知っていたものだったのではなからうか。この場面で作者の詠んだ「笛の音のただ秋風と…」の歌に対して、姉が「げに」と受けてのやりとりについては、「前者は萩の葉（女性）のつれなさを責め、後者はそれをうべないながらも、笛の音（男性）のすげなさを訴えたもの」（小学館新全集頭注）、「なるほどと作者の歌の趣向に感心した姉は、それなら私はと、趣向を変えて次の歌を詠む」（新潮集成頭注）、「敢えて、逆の立場に身を描き、反論したまでのことであり、当の展開が戯れとしてある実相を見落としてはならない」（更級日記全評釈）、「同じように言ったのではおもしろくなく、何らかの点で違うことを言わねば唱和にならない：そうした気持は、姉が『げに』と断つたうえで、妹と反対に男の冷淡さに転じたのもわかる」（講談社学術文庫）、「その場の同じ出来事を同じように感じる感性の同一性」（久我有生氏<sup>⑥</sup>）などの指摘があり、「げに」は、妹の歌の、女性を責める内容または趣向に賛同しての言葉、あるいは戯れの掛け合いの象徴や、感性の共鳴を示すものといった、様々な受け取り方がなされてきたのだが、作者の歌の「ただ秋風と聞こゆる」を受けての「げに」である、という解釈も出来るのではなからうか。すなわち、作者の歌における「秋風」を、少なくとも姉は「飽き」とかけて理解した、と見るのである。作者の歌については、通常、

笛の音がたまたま秋風の音とばかり聞こえるのに、秋風が吹くと葉  
ずれの音を立てる萩の葉が、どうして「そよ」とも答えないのでしょ  
うか  
（新日本古典文学大系三九〇頁脚注）

のように、単なる季節を表す「秋風」と解するのであるが、前掲の『後

撰集』中務の歌を参考にすれば、「秋」と「飽き」をかけたものと見ることもできよう。仮にそう解する場合、作者の歌は、

（立ち去って行く）笛の音からは、男の側ではたまたま女に飽きが来  
ているように聞こえるのに、どうして「萩の葉」（女）は、「そよ」と  
も答えない（引き留めようとしな）いのでしょうか。

といったような内容になるだろう。作者が「秋」に「飽き」をかけたつもりかどうか、この歌からは判然としないが、少なくとも姉の方は、妹の歌について、「秋」に「飽き」を響かせたように受け取って（あるいは敢えてそのように解釈して）、「げに」（本当に、笛の音は「飽き」風のように聞こえる）という同意を示した上で、その女に飽きた男の側の素っ気なさを批判した歌を詠んだのではなからうか。

この笛を吹きつつ過ぎ去る男について、浮舟に求婚する中将像を重ね合わせる見方もあるが、ここで述べたように、すでに交際があつて後の男の心変わりを想定してみると、浮舟の場合とは異なってくる。たしかにここは物語的な場面ではあるものの、「恋を成就させることができなかつた」、すなわち恋の不成立という場面ではないように思うのである。ここで見方を変えて、「夜に現れて笛を吹く男」という設定に注目して考えてみると、柏木由夫氏<sup>⑦</sup>が指摘されたように、『伊勢物語』の業平が思い出される。密通が発覚して蔵に幽閉された高子の許を、業平が訪れるものの応答は無く、会えずに帰るといふ、よく知られた六十五段の次の場面である。

この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、  
声はをかしうてぞ、あはれにうたひける。かかれば、この女は蔵に  
こもりながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあら  
でなむありける。

さりととも思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身をしらずして

と思ひをり。男は、女しあはねば、かくしありきつつ、人の国に歩きて、かくうたふ。

いたづらにゆきては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ  
 (新編日本古典文学全集『伊勢物語』一六九―一七〇頁)

我が身の破滅をも顧みず、禁断の恋の熱情に身を任せた結果、二人は引き裂かれるのだが、業平はそれでも会いたさに禁を破って訪れ、笛を吹く。しかし高子は幽閉されているため、それに応えたくても応えられない。業平は、応答が無くとも「見まくほしさに誘はれ」つつ、夜ごとに現れては笛を吹き、唄うのであった。

『更級日記』の作者らが、『伊勢物語』を入手して読んでいたことは、日記の記述からも知られるところであるが、夜に現れて女に声をかけ、応答が得られないまま笛を吹く男に、業平を重ね合わせなかつたであろうか。業平ならば、女への思い故に、応答が無くてもそこにしばらく佇み、笛を吹いたであろうし、毎夜「行きては来ぬる」ことを繰り返すはずであるが、この現実の男はあまりに対照的であった。女に飽きが来ているのであろうこの男は、お義理程度に呼びかけさせ(呼びわづらひて)とあるので、数度は声をかけたのであろうが、返答がないと見るや、笛を吹きつつ立ち去って行くのである。ここでの女は、高子のように幽閉されたわけではなく、恐らく拗ねて返事をしなかつたのであろうが、或いは女の身に何らかの異変が起こつて、返事のできない事情があつた可能性もある。しかし男はそうした事情を斟酌する様子もなく去って行く。そもそも、この男が「萩の葉」に会いたくて訪ねてきたのかも疑わしい。実際のある女の家の前を、たまたま通りかかつたので、そのまま素通りも出来ずに声をかけさせたか、あるいは「萩の葉」の歌を貰つたために、とりあえず女の気持ちをやなだめようとして訪れただけの可能性もある。業平とは正反対に、毎夜来るどころか恐らくは当分、いや二度と来

ないかもしれない。物語好きの姉からすれば、笛を吹きつつ通り過ぎる男の態度は、業平とはあまりにも対照的で、愛情の無い、情けないものと思われたことであろう。そうした思いを表わしたのが、後の姉の歌だつたのではあるまいか。

## 二 姉の思い

この「萩の葉」の段のみを取り出して考えるならば、そこに『伊勢物語』の影を想定して読むのは、あるいは深読みであるのかもしれない。しかし、拙稿で述べたように、転生した猫の段からこの直前に至るまでのエピソードの根底には、相手に対する、或いは相手からの、思いの深さ故の転生譚が横たわっていたことを考えれば、そこに物語の登場人物に見られるような「心深さ」を強く希求する姉の思いが窺えるように思う。ここで、改めて転生した猫の段以後の流れを振り返っておきたい。

作者が大納言の姫君を追慕していた頃、姉と物語を読んで起きていたところへ突如現れたのがこの猫であった。この猫には、伊井春樹氏が指摘されたように、女三宮の猫との重ね合わせがあると見て良いだろう。『源氏物語』の猫は、柏木が女三宮に対して制御の効かぬ恋情を抱く発端ともなり、女三宮の形代として柏木に愛され、さらには懐妊の予兆としての夢にも現れた。物語読者にとって、柏木の女三宮への強い思いを象徴する存在であつたものと思われる。『更級日記』においては、猫の出現の後、姉は、猫が大納言の女の転生したものであるとの夢を見ているが、この夢の背景には、源氏物語を読んだ読者として抱いていたであろう、猫へのそうしたイメージが影響していたことは、否定できないように思う。そうして猫は、この姉の見た夢によって、妹の大納言の女への強い思いをも引き受けた存在となつた。この頃、姉は「わづら」つていたと

ある。言われるように、懐妊を表わすものと見て良いであろうが、女三宮は、愛ゆえに身を滅ぼすほどの、柏木の強い愛情を受けての懐妊であったのに対して、姉はどうだったのだろうか。姉の夫についての記述は、『更級日記』には全く見られない。姉が子を産んだ折の喜びも描かれず、亡くなった後の挽歌群にも、夫の歌が見られないことは、稲賀敬二氏により指摘された通りであり、夫婦円満とは言えない状況にあったことは推測できよう。女三宮とは対照的に、おそらくは愛が薄い夫との間の子を身籠っていたのである姉は、この猫をどう思うで見えていたのだろうか。

その後、転生した猫の存在に触発されたのか、七夕の折に『長恨歌』の物語を人に頼んで入手しようとする記事が続く。その物語が、転生譚を含むものであった可能性が考えられることは既に述べたが、転生譚の有無に拘らず、愛ゆえに身を滅ぼした楊貴妃と玄宗の物語であることは間違いない。玄宗は、楊貴妃の死後に至ってもその面影を忘れ得ず、追慕し続けるのであった。

この『長恨歌』の物語を求める話に続く場面が、「萩の葉」の段の前半にあたる「ただ今ゆくへなく飛びうせなば」という姉の発言を中心とするくだりである。ここにも帝との婚姻および転生譚を含む竹取物語の影が見えることは指摘した通りであり、そうした竹取物語に登場する帝は、かぐや姫を失って後、形見をも燃やす程の強い思いを抱き続けるのであった。自らも（かぐや姫のように）いずこともなく飛び失せたなら、どう思うかしら—というこの発言は、ただの思いつきやいたずら心、あるいは物語好きな女の幻想、というよりは、もう少し深刻なものを読み取るべきではないかと思う。従来の研究においては、「ゆくへなく飛びうせなば」の方に注目が集まりがちであったが、むしろ「いかが思ふべき」に姉の思いが表出されていたのではなからうか。自身がいなくなったら、

あの竹取物語の帝のように、深く追慕してくれる人はいるのだろうか、という姉の不安である。仲の良い妹は悲しみ、慕い続けることは分かっているはずであるから、一見、目の前にいる妹に向けられた言葉のようでありながら、その奥底には、自身がいなくなったら、かぐや姫を追慕する帝のように、夫は追慕してくれるだろうか、おそらくそうではあるまいという、姉の絶望あるいは諦めにも近い思いが込められていたように思うのである。この発言に対して、作者が「なまおそろし」と思ったというのも、それだけ姉の口調が深刻であったことを示しているよう。

柏木も、玄宗皇帝も、竹取の帝も、或いは命をかけ、或いは地位をも失うほどに一人の女を強く愛した。その続きで見ると、この「萩の葉」の後半に見える笛を吹く男のイメージの根底には、「逢ふにしかへば」〔伊勢物語 六十五段前半〕と、「身もいたづらに」〔同〕なろうとする身の行く末を自覚しながらも、なお高子への思いを捨てきれず禁を犯す業平のイメージが、意識されていると見て良いのではなからうか。しかし、この男の笛の音は、業平とは正反対に機能していた。女からの返答を得られなかった照れ隠しか、あるいはむしろ既に興味の薄れた女から返答が無かったことを幸いとする気楽さからなのかは分からないが、いずれにしても、物語とはまさに対照的な現実を象徴するものであったろう。

穿った見方をすれば、姉には、夫とこの男が二重写しになっていたかもしれない。その直前に「ゆくへなく飛びうせなば、いかが思ふべき」と尋ねていた姉にとつては、返答の無い女の身を案じるどころか、早々に立ち去って行くこの男の行動こそが、自身の問いに対する現実的な答えとなっていたのではなからうか。

そのように考えると、姉の「ゆくへなく…」発言と、笛を吹く冷淡な男の記事は、別個のエピソードではなく、有機的に結びついていると見るべきではないかと思うのである。

## 三 猫の死、そして姉の死

「萩の葉」の段には、猫の焼死の記事が続く。底本傍注によれば該当する火事の記録は見られない由であり、この火事が事実であったのか否か、確かめる術はないが、猫の死は、猫がかつて夢の中で「ただしばしここにある」と述べていたことからすれば、作者らの許に滞在すべき「しばし」の期間が終わったということの意味するのである。転生譚を含む竹取物語のかぐや姫は、この世での縁が尽きたことを宣言するなどして姿を消し、残された形見は、帝の思いにより火がついて燃え尽きてしまふのであるが、猫が焼死したという記事は、こうした結末をも思い起こさせる。この焼死により、猫を中心とする転生の物語は終わりを告げるのであるが、その後、姉は子を産んで亡くなっている。姉が懂れていたであろう、深い愛情の象徴であった猫の後を追うように、自らも命を落としたのであった。

続く記事では、姉の死後になって、姉が生前に探していた折に入手が叶わなかったという『かばねたづぬる宮』の物語が、皮肉にも届けられたことが記されている。この物語は既に散逸して伝わらないが、『風葉和歌集』に二首を残すとともに、『狭衣物語』の一部伝本の跋文に、以下のよう記されている。

「たゞ、男の心は薫大将、かばね尋ぬる三宮ばかりこそ、あはれにめやすき御心なめれ」と、からうじて、思ふ給へつれど、「男も女も、心深きことは、この物語に侍る」とぞ、本に。

(岩波古典文学大系『狭衣物語』四六七頁)

『かばねたづぬる宮』は、その題名から知られる如く、亡くなったと信じられる恋人の屍を探す宮の物語であると考えられている<sup>16</sup>。この跋文では、薫

やかばね尋ぬる宮の主人公が、「あはれにめやすき」御心だと思っていたが、『狭衣物語』の登場人物はそれにもまさって「心深(愛情が深い)」なのだと思われているのである。薫とかばね尋ぬる宮の奈辺が「あはれにめやす」いのか、具体的に触れられてはいないが、『無名草子』の記述などが参考になるのか。『無名草子』では、薫のことを、物語にも現実にもこれほどの人はいないと最上級の評価をしており、亡き大君を追悼する薫の様子を絶賛する<sup>17</sup>。薫の女性に対する誠実さ、心深さを評価していたものと思われ、当時の読者はそうした薫を男性の理想像としていたことが窺える。かばね尋ぬる宮についても、復元された内容からすれば、やはり亡き恋人への心深さが評価されたものである。『更級日記』の作者の姉がこの物語を読みたがっていたというのも、これまで述べてきた姉の思いからすれば、当然であると言える。

うづもれぬかばねを何にたづねけむ苔の下には身こそなりけりという、当該物語入手直後に作者の詠んだ歌の内容にも、ここで注目しておく必要がある。『何にけむ』という表現をとる場合の用例を調べてみると、その多くはただ「どうして〜だろう」という意味ではなく、「何だつてそんなことをしたのか、しなければよかったのに」といった後悔、あるいは他者の妥当性を欠く行動や思考を不審としたり責めたりする意味で用いられる<sup>18</sup>。ここでは、物語の中における主人公が、本当は「うづもれ」ていなかった恋人の屍を探したことに対する、「何にけむ」であろうことは既に拙稿で述べたが、これが姉にも向けられたものであるとすれば、この歌はどう捉えるべきであろうか。この歌の解釈については、『かばね尋ぬる宮』という物語の不吉さに注目して「何だつてそのよな物語を入手しようとしたのだろう」という作者の言とする見方もあるが、それでは、以前に「ゆゆし」とされる『長恨歌』の物語を強く望んで入手したはずの、作者自身の行動と矛盾するのではないかと思われる

る。従ってここでは、「姉は何だつて『恋人の屍を探す』という（心深い主人公の）物語を欲しがったりしたのだろう、自身はそれを得られないまま墓の下になってしまったのに」という、物語に描かれるような深い愛を求めつつ手に入らぬまま亡くなった姉に対するやるせない思いを詠んだ歌だったという解釈も可能なのではなからうか。

姉の死をめぐって詠まれた歌は八首に及ぶが、これは「ゆくへなく飛びうせなば、いかが思ふべき」という姉の問いに対する実質的な答えが示された箇所であるとも言えよう。八首の歌は、姉の死を悼む家族の思いでもあり、同時にそれをここに書き記した作者の、姉に対する強い思いの表出でもある。一方でそこに姉の夫の歌が無いことは前述した通りであり、姉の死の直後に子らとともに休む作者の記述なども併せれば、姉の夫の愛情はやはり薄かったと見て良いであろう。姉の思いを深く理解する作者が、その寂しさを埋めようとするかのように、あえてここに多くの挽歌を記録したようにも思われるのである。この挽歌群には、姉の「形見」「跡」といった、故人を偲ぶ常套句だけでなく、その墓を「たづね」といった歌が多く詠まれていることや、『かばね尋ぬる宮』をよこした人からの歌も含まれることなどから、当該物語との関連を想定すべきであろう。こうしたことは、姉のこの物語に対する思いの強さを周囲が理解していたことを窺わせる材料と言えるのではなからうか。物語中で恋人の屍を探す宮は、その墓をも探したのである。姉が亡くなった今、その墓を尋ねるのは恋人や夫ではなく、継母・兄弟や乳母といった人々ではあるが、せめてその物語に擬える歌を詠むことで、亡き姉君を慰めたい、との思いが込められているように思われる。

#### 四 転生した猫の出現から姉の死をめぐる段までの構成意識―おわりに

冒頭で述べたように、転生した猫とその周辺に配された記事は、特に緊密なつながりがあるという捉え方はされていなかったのであるが、本稿で述べたように、猫の出現から死、そしてさらに姉の死をめぐる記述までは、次のような関連性から成り立っていると読むことができる。

転生した猫（作者が大納言の姫君を慕う深い思いの結果としての転生、また柏木の女三宮への思いの象徴）の登場↓『長恨歌』の物語を求める条（深い思いに引かれての転生）でのつながりか）↓「ゆくへなく」という姉の発言（強い思いに引かれて転生したかぐや姫との関連、自身への心深さを求める姉の思い）↓「荻の葉」の段（心深さとは正反対の、愛情の薄い男の登場。そうした男を批判する姉）↓猫の焼死（心深さの象徴であった存在の消滅）↓姉の死↓『かばね尋ぬる宮』の条（心深い主人公を描いた、生前姉が求めていた物語）↓『かばね尋ぬる宮』に擬えた歌を含む、姉を追悼する挽歌群

『更級日記』において、姉に関する記述は、ほぼこの猫の段以降に集中しており、猫と姉の思い出とは密接に結びついたものとして描かれている。猫は、たしかに作者の大納言の姫君への思いから転生したものとされてはいるが、その夢を見たのは姉であり、作者はその言を信じたに過ぎない。従って転生への強い関心を寄せていたのは姉の方だったのだろう。そして、その転生への関心が何から生まれたものかも、ここに挙げた一連の流れから読み取ることが出来る。姉にとつての「転生」は単なる口マンではなく、愛の深さ、すなわち心深さの象徴であり、そうした愛情こそ、作者の姉が希求していたものだったのである。

そもそもこの猫は実在したものだったのか、また、それなりの広さの

邸に住んでいた筈の作者らの耳に、隣家の「萩の葉」という声は本当に聞こえたのか、猫が焼死したという火事は事実であったのか。それらについて確かめる術はないが、それらが事実であったにせよ、一部創作であったにせよ、作者が姉について一番記しておきたかったことがここに描かれていることには間違いないであろう。仲の良かった姉との思い出は様々あったに違いないが、その中から作者が選り取ったのは、姉が心の奥底に抱える哀しみ、愛を求める強い思いであった。この段は、転生した猫・長恨歌の物語・竹取の世界・業平を思わせる笛という、物語的要素がちりばめられ、一見物語好きな姉のロマンチックな感傷や幻想を描くようでありながら、物語世界を反転させたような現実も同時に描いている。そのあとに続く転生した猫の死は、あたかも物語世界に描かれる「心深さ」が夢幻であったことを知らしめるかのようであり、その後姉は亡くなる。この猫の出現から姉の死に至るまでの記述は、物語を好み、その世界に理想の愛を見いだしながら、現実とのギャップに苦しんでいたであろう姉の思いを、まさに表象した構成になっていると言えるのではあるまいか。

### 注

① 小谷野純一氏は転生した猫の出現の条について、「執筆主体が、一つの譚としての形象を目論んでいるであろう」とし、萩の葉の段の歌のやりとりについて、「そこには、彼女の物語憧憬が介在している」とされる（『更級日記全評釈』一九九六年、風間書房刊）。また、関根慶子氏は猫の段と「行方なく……」の条について、それぞれ「作者の少女らしい感傷と姉との浪漫的心情がクローズアップされて美しい猫物語の短章となっている」、「ロマンチストである姉と妹の当時の生活断片を見せてくれる一条である。そして猫の段と共通する、姉の幻想的な性向がうかがえる」とされる（講談社学術文庫『更級日記（上）全訳注』）。また、新潮日本古典集成『更

級日記』（秋山慶氏）では、「行方なく……」萩の葉の条について、「姉の念頭に『かぐや姫』が想起されていたものか。作者同様物語好きの空想家であり、やがて夭折した姉と一緒に過したひとときの思い出が、いたわしく懐かしく回想されている」とされる。

② 拙稿「夜の寝覚」の女君「かぐや姫と楊貴妃と」（『源氏以後の物語を考える―継承の構図』二〇一二年、武蔵野書院刊）三二―三五頁。

③ 堀内秀晃氏は『更級日記』校注古典叢書（一九七七年、明治書院刊）の注において、「二人の間で通用する呼び名。女の歌にでもちなむか」とされる。「萩の葉」の呼称について、諸説では「女の呼び名」（新潮集成・新大系）「女の別名」（学術文庫）「本来の名というより、何かのゆかりでつけられた呼び名であろう」（全集）とする他、「ある女の隠し名かまたは歌の詞をいひかけたるにか」（関根正直氏『改訂更級日記略解』一九〇〇年、明治書院刊）、「歌を踏まえての謎かけ」（柿本奨氏「解釈断章―古今集・更級日記―」、『学大国文』一三三号、一九七〇年）のように、和歌に関連付ける見方も示されている。

④ 実川恵子氏「更級日記」萩の葉小考」（文教女子短期大学『文芸論叢』三〇号、一九九四年四月）

⑤ 注④論文五〇頁。

⑥ 久我有生氏「更級日記」「猫への転生」段の位置づけ」（『解釈』五八巻三・四月号、二〇一二年四月）

⑦ 秋風に、雅楽の「秋風楽」をかけるとの見方（新全集・学術文庫など）もある。

⑧ 和田律子氏は「更級日記」論にむけて―「萩の葉」の段から考える―」（『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』所収、二〇〇四年、新典社刊）。後に「藤原頼通の文化世界と更級日記」所収、二〇〇八年、新典社刊）において、恋の場面を吹く・恋を成就させることができなかつた、という「恋の場面の主人公としては例外的」な人物造型の共通性がある一方で、中将のような戯画性は見られないことなどから、この場面での男を「薫像を重ねた中将像」を抽出して造型されたものと指摘される。

⑨ 柿本由夫氏は「更級日記の表現をめぐって」（『昭和学院短期大学紀要』一七号、一九八一年三月）において、「男が女の許に通って来て笛を吹く

という状況設定はいかにも物語的なものであり、例えば伊勢物語六十五段の後半で：という話などが、ただちに思い浮かべられる」とされる。

⑩ 注②論文参照。

⑪ 伊井春樹氏は『物語の展開と和歌資料』（二〇〇三年、風間書房刊）第二章第八節『「更級日記」の方法―孝標女の姉―』において、姉の見た猫の夢は、「柏木の女三宮との契りによる、夢を背景にして」いるものとされる。また、河添房江氏も、『更級日記』の猫のエピソードは（女三宮の猫の）間接的な影響下」にあるとされる（『光源氏が愛した王朝ブランド品』、二〇〇八年、角川学芸出版刊）。

⑫ 玉井幸助氏『更級日記新註』（一九二六年、育英書院）をはじめとして、これを懐妊と解する注釈は多いが、小谷野純一氏は、「時間的に成立し難いであろう」（注①書二九三頁）とされる。一方、伊井春樹氏は注⑩論において、第一子妊娠であろうとの推定をされている。なお、『更級日記』中で、猫の出現は治安二年、火事は翌治安三年四月であり、その後、転居した先で「向ひなる家に梅紅梅など咲き乱れて」とある記事が春の描写であることから、その記事以後を治安四年と判断し、「その年五月」の姉の死亡も同年とするのが通説であるが、転居先でのそうした描写には、「かへる年」といった表現が見られないことから、火事に起因する転居後、折にふれて感じたことを、後から振り返って火事の記事の続きに述べたに過ぎないという見方も可能ではなからうか。そう解釈した場合には、姉が死亡した「その年の五月」というのは、火事の起きた同年、すなわち治安三年五月と判断される。姉の出産・死亡が治安三年だとすると、夢を見た折の姉の病氣は第二子懐妊を指すとの見方も出来よう。すなわち、第二子懐妊時期は（姉の死を治安三年とすると）治安二年秋ごろとなるが、この猫の夢は猫を飼ってからしばらく後のことであって、具体的な時期についての言及はないことから、第二子の悪阻に苦しんだであろう時期（治安二年初冬ごろか）に見た夢であるとしても、矛盾はないからである。この記事に続くのは七夕の記事であるため、時期が前後するが、猫の夢は、猫に関する記事として前にまとめたのだとも考え得る。なお、柏木の見た猫の夢自体については、猫そのものではなく、その「授受」という行為が懐妊を表す夢として機能しているのだという見方も示されており、（藤井由紀子

氏「柏木の猫の夢」、『国語国文』七七卷二号、二〇〇八年二月）それに従うべきであろうが、いずれにしても源氏読者の側の問題として見た場合、夢に登場する猫が、女三宮の懐妊のイメージと強く結びついていたのであることは、想像に難くない。

⑬ 稲賀敬二氏は、「孝標女の初恋の人は「零に濁る人」か」（『国語と国文学』四五卷一二号、一九六八年一月）において、一連の挽歌群に夫の歌がないことについて、「亡姉の夫との交渉をできるだけ日記中に隠蔽しようとする微妙な心理が働いていると見られるかもしれない」とされる。作者と姉の夫との交渉の有無はともかく、姉の夫の歌が見られないことについては、姉とその夫との疎遠を想定すべきであろう。実際に夫がこの姉の死に際して歌を詠まなかったとしたら、既に離縁あるいはそれに近い状態であったと見るべきであろうし、仮に詠んだにも関わらず、作者が書きとめなかったとするなら、そこに作者の何らかの作為が働いていると見て良さそうである。生前、夫の姉に対する冷淡さを見知っていて、夫の歌を日記に乗せることが姉の供養にならぬと判断したか、作者自身、そうした姉の夫に対して反発を覚えていた等の可能性も考えられるのではなからうか。

⑭ 注②論文。

⑮ 同右。

⑯ 詳細については、拙著『夜の寝覚』の構造と方法【平安後期から中世への展開】（二〇一一年、笠間書院刊）第十二章「うづもれぬかばね」の物語」を参照されたい。

⑰ 『無名草子』では、「薫大将、はじめより終はりまで、さらでもと思ふふし一つ見えず、返す返すめでたき人なんめり。：すべて、物語の中にも、まして現の人の中にも、昔も今も、かばかりの人はありがたくこそ」（新全集二〇二頁）、「大君を追慕する歌」：とのたまふこそ、いみじくあはれにうらやましけれ。かかる人持ちてこそ、死なむ命もいみじからめ、とおぼゆ」（同二二二頁）とする。対して源氏については、浮気心や権力欲の強さを挙げて批判している。

⑱ 注⑩書二六九～二七一頁。

⑲ 注⑩書二七一頁。

- ⑳ 新全集頭注（犬養廉氏）では「『かばねたづぬる宮』などという不吉な物語を、姉はまたどうして求めていたのでしょうか」とし、新大系脚注（吉岡廣氏）もほぼ同様の解釈を示している。
- ㉑ 日記冒頭近辺で、「姉、継母などやうの人々」から物語のことを聞いた、

という記事はあるものの、姉に関する実質的な記述はこの一連の件のみである。

（本学非常勤講師）